

# 脳における エストロゲンの見えざる作用 —母性と報酬システム—

東京大学名誉教授  
医療法人社団レニア会アルテミスウイメンズホスピタル理事長  
武谷 雄二

## はじめに

古今東西を問わず母親は子どもが危険な状況になると我が身を挺して子どもを守ろうとするといわれてきた。ヒトのみならず動物でも母親に共通な属性であり、このことから子どものためにすべてを犠牲にするというのは母親の本能という考え方が根付いている。このような母親の行動特性は母体本能ともいわれているが、はたして本能といえるのだろうか。

また母性は本能であるなしに関わらず、ほとんどの女性がわが子に接すると限りない愛情が湧き出てくる。子どもへの愛情が芽生えるしくみの破綻が育児放棄・児童虐待につながると思われる。本稿では母性の背景にある生物学的なしくみを考えてみたい。

## 母性は本能ではなく 文化として社会の中で育まれる

本能とはいかなる環境でも自然に発達するものであるが、母性はさまざまな社会的経験を積むこ

とで次第に醸成されるものであり本能ではない。換言すると人類が営々と築き上げてきた文化によって伝承されてきたといえる。たとえば子どものおもちゃについて考えてみると、女の子は子育てに関係するものが多い。別に女の子が自ら選んだわけではなく、当然のこととして与えられる。いわば女の子は幼少時から親となることを刷り込まれていることになる。また世界に先駆けて女性の自立を追求してきた米国でさえ、子育ては女性の規範であり、それを怠ることは自己中心である (selfish) という考えはいまだ根強いものがある。つまり女性の子育ても社会の慣行ということで暗黙のうちに男女ともそれを当然のこととして受け止めてきた。つまり女性が子を産み、育てることは、民族、国家の存続に不可欠なものである。このことを女性の本能 = “母性本能” とみなして法律、倫理、信条、宗教などを超えた人間の道 (当為 = sollen) として、世代を超えて確実に継続されるようにしてきたという解釈もできる。このように考えると母性は生来女性に備わっているものではなく、厳密な意味での本能ではない。母性が本能ではないことは、サルにおいてもメスのサルが仲間のいない状況で育てられると、オスの

注：母性とは母親であるという状況、あるいは母親に特徴的とされる精神状態、感情などを含むもので、母性本能よりさらに広範な概念である。上述のごとく母性も厳密には本能とは断定しがたい。